

【動物】牛、ホルスタイン種、雄、0日齢（出生直後）

【臨床症状】舌は口腔外に大きく露出し、舌端は10×6×6 cm大の腫瘍状を呈していた。その他の肉眼所見はなく、血液検査結果も正常範囲。安楽死後に舌腫瘍のみを精査した。

【肉眼所見】腫瘍断面は灰白色充実領域と褐色脆弱領域から構成されていた。

【組織所見】舌腫瘍は多彩な形態をとる腫瘍細胞の増殖により構成される。少量～中等度の線維状間質を背景に、比較的小型の多角形腫瘍細胞や紡錘形腫瘍細胞の増殖を認め、好酸性のやや広い細胞質を有する横紋筋芽細胞様腫瘍細胞、細胞質が好酸性細線維状で細長く、核の連鎖を示す筋管細胞様腫瘍細胞および多核巨型細胞がさまざまな割合で混在する。腫瘍細胞の核は、類円形、紡錘形あるいは多角形を呈し、大小不同、核分裂像を高頻度に認める。しばしば多核細胞が出現し、核鎖様に密接して連なる部位も散在する。腫瘍細胞の細胞質は好酸性で線維状、均質、稀に凝固様を呈し、HE染色、PTAH染色にて一部の腫瘍細胞に横紋構造を認める。巨細胞、横紋筋芽細胞様細胞の細胞質はときおりPAS陽性を呈する。腫瘍内には大小様々な血管の形成を多数認め、充・うっ血、出血壊死巣が多発する。腫瘍細胞の大部分はvimentinに陽性、紡錘形腫瘍細胞ならびに巨細胞はdesmin、myoglobinに陽性、一部の小型腫瘍細胞の核内にMyoD1、myogenin陽性、巨細胞の一部はαSMAに陽性。また、腫瘍細胞間にIba-1陽性細胞、CD163陽性細胞が散在。腫瘍細胞はMelan-A、S-100、Iba-1には陰性。

【診断】新生子牛の舌に発生した横紋筋肉腫（先天性横紋筋肉腫）

【考察】形態並びに免疫染色態度より横紋筋肉腫と診断した。腫瘍細胞は多様な形態をとり、様々な横紋筋分化マーカーの発現を認め、筋系細胞の多様な分化段階を反映していると考えられた。また、腫瘍間質には多数のCD163陽性細胞（M2型マクロファージ）を認め、腫瘍随伴マクロファージとして、腫瘍の増殖促進に関与した可能性を疑った。牛の横紋筋肉腫は稀な疾患であり、新生子牛では過去に1例（ホルスタイン種の側頭部）が報告されているのみである。舌における発生事例は本症例が初めてである。（菱川創太、寸田祐嗣）

【参考文献】

1. Ulrich R *et al.* Congenital embryonal rhabdomyosarcoma of the head in a red and white German Holstein calf: Tierarztl Prax Ausg G Grosstiere Nutztiere. 2014 42(2): 100-105.
2. Hatai H *et al.* Primary pharyngeal alveolar rhabdomyosarcoma in an adolescent Japanese black heifer: J Vet Med Sci. 2020 June 82 (8): 1146-1150.
3. Jacinto JG *et al.* Congenital tumors and tumour-like lesions in calves: a review: J Comp path. 2021 February 184: 84-94.